阿部知二全集

第12巻

阿部知二全集

第12巻

河出書房新社

阿部知二全集　第12巻

一九七五年三月　十　日　初版印刷
一九七五年三月十五日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

ヨーロッパ紀行――7
歴史のなかへ――109
まえがき――111
講和にたいする意見――113
遺憾という意味――113
再軍備・文学――118
罪なき死刑――123
今年のこと、去年のこと――126
国民戦線ということ――130
メーデー特別弁護人として――138

万里長城 147
真　実 149
裁　判 152
疑わしい場合は…… 158
努力の方向 159
左社大会傍聴 162
書斎に帰れる時代を 167
ガリヴァーの寓話 170
人間の名において 173
流れの変化 175
社　会　党 177
平和のなやみ 185
新しい革ぶくろ 191

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

親子心中 192
平和の思想と政治 197
「文化の日」に想う 207
中国から帰って 208
その先にあるものは…… 234
人間蔑視に抗して 237
人間とは何か——広津和郎のこと 244
荒海のほとりで 252
良心的兵役拒否の思想（抄） 263
解題 榎林哲 329
解説 篠田一士 339

阿部知二全集　第12巻

ヨーロッパ紀行

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

アジアの憂鬱

むし暑い八月十七日の夜半に羽田を立ったが、それからはまっ黒な闇の世界だった。このフィリピンの会社の飛行機は、三四十分おきほどに、強風か強雨かにぶつかっているらしく、その度に揺れる。同乗の外人たちは男女ともよく眠っているようだが、私には真似られぬ芸当だ。眠れぬのは、出発準備の連日の、心身の疲労が凝っているためでもあり、また未知の世界に出ていく期待と不安とに神経がたかぶっているためであろう、と言訳をしてもみるが、やはり根本は私が臆病だからであろう。羽田に送ってくれた人々にも面目ない。無為無能の私を力づけて、あらゆる犠牲的努力をして、最後まで見とどけてくれたペン・クラブその他の人たち、その中に、さっき別れてきた川端氏や水島氏の顔が、はっきりと思い出されて、気の弱りか、ひどく懐しいのである。

近くでは、中国国民政府軍の将校らしい青年が、達者な英語で、アメリカの新聞記者らしいのに、まくし立てている。眠ろうとあせる耳に、いかに抗戦の意気が高いかという、演説じみた雄弁が、きれぎれに入ってくる。——その彼もねむり、やがて窓の下のばくばくたる世界が、しだいに灰青色になってきたが、それがいちめんの雲霧なのか海なのか分らぬ、と思う内に、混血のエア・ガールが窓の幕をとじた。台湾に来たのであろう。日本のまわりに近接して、戦争の匂は強烈濃厚である。早朝の、きわめて暑い台北飛行場では、もはや訓練をしている若い兵隊が見える。しばらく喫茶店で休むうちに、パキスタンに貿易に行くという高島屋のO氏と知合い、爾後同地につくまで旅なれた同氏の世話になった。それから、さっき新聞記者と見たアメリカ青年ともちょっとはなしたが、彼はテレヴィジョン会社の特派員で朝鮮の戦争に行って本国に帰るところであった。中国青年はアメリカで訓練を受けた飛行将校だったのだそうだ。

そこから少数の客で飛び立ってからも、「戦争の幕」は台湾西南の海上に出るまで、降りつづけていた。この島にかつていた日本人の痕跡が残っていようといまいと、すでにここは異国であり、われわれにとざされた地である。——むかし、太平洋戦争のはじめに、「徴用人」と呼ばれて、台湾人軍夫の歌というのを、器用な松井翠声さんの音頭取りでうたって、軍人の顔をしかめさせながら、この辺を貨物船にのって南に向っていたのか、と青いしずかな海面を、まことにがい感慨で見おろし、それには「父は取られて蒼れの軍夫」とかという、哀れで皮肉な文句があっ

たな、とおもい出したりする。それから、今の時になっても、まだ平和はどこにも来てはおらないのである。

香港ははじめてだったが聞きしにまさる立派なところである。飛行場の垣根には熱帯の花がうつくしく咲いている。私がむかし上海で教えた張君という若い新聞記者が、――不完全な連絡ながら来てくれているかと思ったが、その姿は見えず、やはり同じ聖ジョン大学出の他の新聞の青年が来て、同行のK君や私にペンの大会のことなど聞いた。私たちが来るということが分っていたのだそうだ。沈君といい、日本の文学のことなどきき、かつて斎田愛子さんに満洲であったなどと懐しそうにはなし、さてエディンバラの会には、台湾の中国人の代表は行くのだろうか、と質問する。恐らく行くまいがヨーロッパ在住の中国の知識人でもが――あるいは在米の林語堂氏あたりが――出席するのではないか、と答えると、よろこんでいた。彼とのみじかい対話からも、われわれ東洋人は、互に近くに住みながら、文化も思想も、あらゆる種類のカーテンに遮られて、すこしも交流してはおらぬ、というみじめさを感じた。「文化の交流」のはなしをするために、私たちは、広大なアジアとそこの巨億の人間との上を跨いで越えて、はるかなスコットランドまで行かねばならぬのである。そこまで行けば、ひょっとすると中国やインドの人とも逢って文学や演劇や自由の話が出来るかも知れぬ、という始末である。

ひる過ぎに雨もよいの香港を出た飛行機は、華僑の老若男女でいっぱいになってマニラに向った。彼等はおどろくべき人たちである。国境や民族や政治のカーテンなどは意識もしないかのように、その旺盛な生活力で、アジアにひろがっている。――私たちに話しかけたりするものが極めて少い中で、一人、東京から乗った「おっさん」じみた華僑の人は、マニラ住民であり東京でも商売しているといって、ちょっと日本語もいったりして何かにつけて親切を見せてくれたが、彼には、台北でも、香港でも、かならず息子か甥かとも見える青年が、何人か迎えて、手を取り合って語らっているのであった。ひろびろとした気持なのであろうと感嘆した。あちこちに奥さんもあるのかも知れない。

私たちは、日時の都合で、このフィリピン会社の機に乗ったのだが、かねて同地では、対日感情がわるいから万事に気をつけるようにと、方々でいましめられ、当然にそれを予期しながら、しずかな蒼々とした海の上をわたって、リンガエン湾とおぼしいあたりから、その上に入って行った。白日にきらきらと照っているが、決して豊沃とはみえぬ大平原の上に、真白なきれいな綿雲が流れとび、そのうえを私は走っていた。その平原の東北の方には、けわしい青山が、涯しなくむらがってつづいているようであり、そ

のあたりには一面に巨大な入道雲が立ちはだかっている。それが、今日出海たちが、おそるべき「放浪」をしたという山々であり、いく人かの知友や、また多数の同胞が敢えない死をとげたところなのである。しかも、その苦労や死は、何の役に立つのでもなかったのだから、一層にむごたらしい話だ。そして、この平原と山との一帯が、日本人の無限の悲しみと、比島人の無限の怨みとで満たされているのだとおもうと、心が重苦しくなるばかりである。

マニラ湾の上で、さきの華僑紳士は、数多くの軍艦や商船が毀れ半沈みになっているのを、日本のだよ、と親切に教え示してくれる。悪気はないようだから、感心した顔をしてうなずくことにした。濁った色の湖の上や不毛の草原の上を旋回しながら、とうとうマニラ飛行場についたが、そこで、私たちは明朝立つヨーロッパ行きの更に巨大な機に乗りかえるために、おろされ、一夜をすごすことになった。そこで全身に浴びた視線や「秘密警察」と名づけたところで闇金(ドル)は持たぬかと問いつめられた次第は、もはや想像に任せるほかはない。一銭のフィリピン貨幣もないわけだが、一夜は飛行会社の客として、マゼスティク・ホテルというので泊るわけである。その警察官の命令で、同ホテルの番頭が、飛行場から、O氏を加えた日本人三人と、アメリカのテレヴィジョンの青年とその友人らしいのを、一つの車でそのホテルへ連れて行ってくれる。街に入ると、下町めいたところにも、風光うるわしい海岸通りにも戦争の傷あとはむやみに多い。私はそれを、半ば苛立たしく、半ば茫然として、熱帯の光のなかに見る。アメリカ人が、何々ホテルのプールに入れるかい、と番頭にきくと、番頭は「ジャブがこわして……」と答えて、それでもちょっとわれわれを気にして口をふさぎ、まあ今日は何階だかでウィスキーでも御馳走しましょう、といっていたが、もちろんわれわれは泥のように沈黙して、それを聞いている。ホテルでは、ひどくがらんとした大きい室に三人で入れられた。三木清たちはこれより上等のところにいたかも知れぬが、とにかく、どこからともなく、当時の軍人軍属の酒臭い放言のひびきが、きこえて来そうな思がする。——さて、飛行会社の負担で泊るのだといっても、さっきからのボーイたちの妙な顔色といい、チップ位は出さねばならぬだろう、と考えて思案に暮れているうち、O氏の貿易上の友人のフランス人だかが訪ねてきて、O氏の顔で小額のペソを借りて、それは解決した。夜の街に出るなどは考えられぬことだから、ホテルの食堂で、バターンやコレヒドルあたりから流れてくるらしい海風に吹かれ、その小額でわずかのビールを求め、つつましく夕食をとっているうちに、疲れが出てきてねむくなり、すぐに室に入って、前後不覚の

眠りに入った。

朝、ホテルの前の、海に近い広場を少しあるく。熱帯の花々は美しい。しかし、ここでも、朝から兵隊が、アメリカ軍人の指揮で調練している。フク団の叛乱は、このマニラの周辺を取り巻いているのであろう。いや、それよりも重態である、と、この地の新聞に転載されたところの、アメリカの一地方紙の社説がいっている。——それによると、すでに相手は一フク団の叛乱ではなく、全コミュニズムとの戦であり、まだ安全の地と思っているこのフィリピンが、まさにアジアに於ける決戦場になろうとしているのであり、要請さえあれば、アメリカは、ここに経済的軍事的に再び足をつよく踏み入れねばならぬ、というのである。——さて、新聞のついでだが、見れば、香港あたりから、日本製の品物が、不明の商標を付して流れこんで来だしたから気をつけろ、というのもあり、日本の再軍備を恐れる記事もあり、また政府物資の遅配を、「ジャブ時間的配給」と題しているのもあり、一日の小さな新聞にも、日本の評判はかくの如しである。神経質すぎるとか気が弱すぎるとかと、私は笑われることかも知れぬが、果して然るか否かは、これからの先々でのことが証明してくれるであろう。とにかく、朝の食事の席で、M・R・Aから帰りの神戸市長一行に逢ったが、どうにもこのフィリピンの気分は大変ですね、ということだった。なお、春だかに訪れてきたここからの少年団を、神戸では大変にもてなした、という市長のはなしだったが、そういう仕事が、気長く念入りにつづけられなければ、この近い国と打ちとける日はなかなかに来ないだろう。

また車で、昨日とちがった米人二人と共々にのせられて飛行場に走ったが、今朝いく分落着いてみれば、坦々とした海岸通りに新しい自動車がさかんに走り、ホテル、クラブ、料理店、大邸宅と、みごとな眺めではあるが、よく見ると、ここにもあそこにも、毀れ崩れた建物のあとが余りに多く、そこに、東京の戦災直後という感じの掘立小舎があり、みすぼらしい人間がうごめいておる。どう考えても、私にとって快い風景ではない。ただ今朝見ると、港の日本艦船の死骸の中に、一つだけ、あまり大きくもないが、生きた日本貨物船が、煙を吐いているのが、山火事に荒れた枯地に、小さな青い芽がひとつ見えるという感じである。それが、正当な産業や文化に裏づけられ、世界の秩序や平和によってそだてられて、これから伸び出して行くものかどうか、——いくら困難な遠い話であっても、そうであってほしいものだ。

まだ九時前だが、暑さははげしく、うるわしく広々とした海岸通りをすぎて、中国人やフィリピン人が——これも

半ば焼けこげた街に――商業をしている場末的地区に入ると、一層に暑苦しい空気である。汚い掛小屋のようなカフェがあり、女給入用と書いてあり、中からものういブルースが流れ、隙間から見ると、もはや朝っぱらから誰かがダンスをしている。さすがは熱地の頽廃の風景だが、このごろの日本国では、他人のことと笑うわけに行かぬかも知れぬ。――飛行場につくと、また、怪しくはないかとしらべられる。同行のK君と話したことだが、鉄にもせよ竹にもせよ椰子にもせよ、さまざまのカーテンで仕切って互に苦しめ合うのをやめて、人間はどこからどこへでも好きなように歩きまわれ、好きなことを互に話し合うことが出来、どこの金だっていいから使える、というようにしたならば、と、いっそ無邪気なことを、切実に思わずにはおられない。

諸国人に交りながら、色どり華やかな見送人のむらがる中を、大きなすばらしいダグラス機にのった。天気はよくて、おだやかな南海上をきわめて心地よく西に向った。コーヒーをのんだり、うとうととしているうちに、仏印中央北部とおぼしいあたりで大陸に入った。褐色じみて青黒い大密林、その間にやせた耕地、小さな部落、赤濁りの川、――ここでも、ホ・チ・ミンのゲリラとの戦争が、眼の下で行われているはずである。大きな雲塊が、ときどき嵐の気をはらんで飛行機をつつみ、視野は灰色にかきくれてしまうが、また雲が切れると、大密林におおわれた山嶽地帯である。タイ国の北辺をかすめたかも知れず、それからビルマの中央部に来たのかも知れない。この辺りまで、去る日に日本人はやって来て、血を流したわけである。午後の茶をのみながら、一またぎに山嶽も密林も大河も越えて行っているわけだが、その一つを越すのに、彼等は地獄の苦しみをしたのであり、そこいらにも、名誉ない徒労の死骨が、土に融けて行っているのであろう。それが、上を仰いで私に何か呼びかけているかも知れないのである。

午後おそく印度の東部の上にきて、「大東亜戦」の悪夢からはやや離れてきたのだが、そのころから、行けども行けども雲と雨だった。ようやく雲が少し切れて、下の陸地が見え出したのは、ガンジス河の三角洲のあたりだったが、これがまた凄い景色だった。というのは、空は涯なくほの暗い灰色であり、その下の大平原はいちめんの水びたしである。戦争、内乱、貧困、饑餓、そして水害、――アジアは呪われた宿命にどこまでもつきまとわれているとでもいうことであろうか、とにかくここは、紫じみた濁流に、ひろびろと蔽われてしまっている。夕方カルカッタについたが、細い雨がまだふりつづき、印度は蒸風呂の中にあえいでいるという感じである。飛行場のレストランで、また一人のアメリカ青年と話をした。日本に何かの新聞か雑誌か

の通信をかねて来て、西をまわって帰るところである。日本のことには通りすがりほどの知識しかないようだったが、どうして日本の大学教授は赤くなってしまうのか、とか、キリスト教なくば日本は西洋を理解し得ないだろう、とかといった。K君がきいたところによると、また今度は日本に布教者として来るのだ、ということだった。後で分ったが、彼は飛行機の中でも、絶えず聖書を読んでいた。東部的な英語といい、清教的青年なのにちがいないが、東洋人をキリスト教化するのは、時おそいのではないか、と私がいっても、特に怒りも反対もしなかった。——いったい私たちが、どこかの食堂の卓に坐っても、人々は決してそこの卓の空席には来ようとしないのであり、これまたひがみといわれるかも知れぬが、正直のところ後々までこれは連続することになるのだ。ところが、そのような場合に、そこへ気さくにやって来て、こだわりなく私たちに話しかけるのは、——これまた後々までつづくことだが、先ず何といってもアメリカ人であった。それは彼等のほがらかさでもあろう、日本人への思いやりでもあろう。決して小さなことではないとおもう。

インドの官憲はあっさりとして呑気で、軽く検査もすみ、夕方飛び立った。しばらく蒸風呂の下の平坦な灰色の半大陸がつづいたが、まもなく日が落ち、機はよほど上空に出たのか、漆黒の空に、四五日ごろの半月が光り、星も大きい。その半月が西に落ちようとするのを、機が追っかけ追っかけしていたわけだが、やはり月の方が早く走って行ってしまった。パキスタンのカラチに近づくころには、まったくの闇であって、下は荒野なのか、沙漠なのか、海なのか、灯一つ見えない。人類文化の発祥の地の一つもこの界隈なのだろうが、まことに空漠としている。夜半に暑苦しいカラチにつき、まずい茶をのみ、O氏と別れた。三日目の夜が来たわけで、さすがに疲れ、また飛び立つと、ひとりでに眠くなる。カルカッタから乗った、ディケンス小説中の偏屈爺さんとでもいうようなひとが、しきりに私たちをからかう様子をしていたが、やがてねむくなったとみえて、横になったが、ジョスランの子守唄のはじめの一節を何十度となく小さく繰り返していた。睡眠のまじないかも知れぬが、植民地的老人の哀しい風情である。

メソポタミアとおぼしいあたりで眠がさめたが、まだ朝にならず真暗である。下は相変らず平かで黒く、灯明りもみえぬ、時々闇の底に線条のようなものが見える気がするが、それが鉄道か石油のパイプラインかは分らぬ。しかし、そのどちらであるにしても、そこには複雑な世界政治の悪因縁がまつわりについているのである。とにかく、この古代文化の地は、まだぐっすりと眠っており、それをおおう

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo